

研究報告

# 在宅生活支援実習を履修した 看護学生の学び

Learning of Nursing Students who Have Taken Clinical  
Practice : Home Health and Care Support.

達川まどか, 藤村一美, 陶山啓子, 西嶋真理子,  
田中久美子, 小岡亜希子, 藤井晶子, 吉田美由紀

Madoka Tatsukawa, Kazumi Fujimura, Keiko Suyama, Mariko Nishijima,  
Kumiko Tanaka, Akiko Kooka, Akiko Fujii, Miyuki Yoshida

キーワード：看護学生, 臨地実習, 地域, 地域包括ケアシステム

key words : Nursing student, clinical practice, community, community-based  
integrated care system

## 要旨

本研究は、在宅生活支援実習で得た学びを明らかにし、今後の実習がより効果的に行えるよう評価することを目的とする。在宅生活支援実習に、参加した看護学生6名にフォーカス・グループ・ディスカッションを実施した。分析は、「在宅生活支援実習を通して、どのような学びを得たのか」について、質的記述的分析を行った。看護学生は、在宅生活支援実習を通して【人間の暮らしと人間が生きることの体感と理解】【地域の特性理解】【地域で働く保健福祉職と住民との緊密な関係性】【理論と実践の融合による大学で学習した知識の深化】【対象者を生活者として捉え尊重し看護することの重要性】【地域で働く保健福祉職が地域医療・保健福祉に意欲的に挑戦する姿勢】【地域一丸となって地域医療・保健福祉に取り組むことの大切さ】【医学生と看護学生の視点・意見の相違】【地域で働く保健福祉職に対する具体的なイメージの促進】を学修していることが明らかとなった。

受付日：令和2年10月24日 受理日：令和3年1月22日

愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻

## I. はじめに

日本は、諸外国に類をみないほどのスピードで超少子高齢・人口減少社会に突入し、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい人生を最後まで続けることができるよう、医療・介護・予防・生活支援・住まいを包括的かつ継続的に提供する体制（地域包括ケアシステム）の構築が進められている。そのような背景を受け日本看護協会は、「地域包括ケアの確立にむけ、今後は病院だけでなく、あらゆる場で看護の提供が必要であり、疾病からの回復だけでなく、予防と健康づくりの視点が全ての看護職に求められる」という答申を打ち出している（日本看護協会,2015）。つまり、これからの時代を担う看護職は、疾患からの回復を支える看護にとどまらず予防や健康づくりの視点を持ち、さらに今まで以上に地域の医療機関、高齢者施設、訪問看護ステーション、市町村保健センター等、地域のあらゆる場で必要とされることが予想され、多職種・多機関と連携・協働しながら、地域包括ケアシステムの構築に貢献することが求められると考える。

表（2017）は、地域を知るための看護師教育として、臨床から生活の場への連続性を担保するための療養者とその家族といった対象理解に加え、地域で生活する様々な健康レベルやライフサイクルの人々の理解が必要であると述べている。2019年10月に出された基礎看護教育検討会報告書（以下,報告書）では、現在の看護教育の現状と課題について言及し、これからの看護職に求められる能力として①対象を理解する能力、コミュニケーション能力②対象の多様性・複雑性に対応できる能力、③対象を生活者として捉え看護サービスを提供できる能力を挙げている（厚生労働省 基礎看護教育検討会,2019）。しかし一方で、学生を対象を捉える視点が病院と在宅の違いや、疾患モデルで対象を捉えることに限定されてしまっている現状や、これまで学生が経験した範囲でしか家族や生活、地域を捉えることができないこと等が指摘されている（柏木,川村,原口,2015）。現代の若者は、核家族、地域との関係が希薄化している環境で生

活している者も多い。また、Social Networking Service（SNS）が普及し、人と実際に会って会話をせずとも簡単にやり取りができ、必要な情報が手軽に入手出来る環境で生活しており、地域社会や異世代交流等の生活経験が不足していることが懸念される。看護職は、対象者とのコミュニケーション等から、対象を理解し対象に応じた看護を展開していく必要があるが、現代の看護学生の中には生活経験の不足から、看護の対象となる人を理解し、生活を想像し整える能力が十分ではない者もいると考える。

このような背景を踏まえ、愛媛大学医学部看護学科においては、2017年度より在宅生活支援実習を開始している。本実習では、何らかの健康問題を持ちながら地域で生活する人々との関わりを通して、地域包括ケアシステムの推進に向けた看護職の役割を学び、生活者を支える地域づくりや健康づくりに貢献できる看護職の育成を目指すことを目的としている。履修対象となる学生は、医学科、看護学科1～3年生で選択制となっており、さらに単位認定は3年生で実習に参加した看護学生のみに行われる。

本研究では、愛媛大学医学部看護学科の在宅生活支援実習を履修した学生を対象とし、看護学生がどのような学びを得たのかをディスカッションによって明確化し、今後の実習がより効果的に行えるよう評価することを目的とする。

## II. 方 法

### 1. 研究参加者

2018年度に在宅生活支援実習を3年生の時点で履修した看護学科4年生のうち、研究の参加について、文書で同意が得られた6名。

### 2. 研究期間

2019年12月18日～2021年3月31日。

### 3. 在宅生活支援実習の概要

#### 1) 実習目的

実習の目的は、『なんらかの健康問題を持ちな

がら地域で生活する人々との関わりを通じて、対象者の価値観やニーズを理解するとともに、対象者の生活を支える家族、専門職、地域住民と関わり、住み慣れた地域で対象者と家族が暮らし続けることができるための地域包括ケアシステムの推進に向けた看護職の役割を体験から学ぶ。そのことにより「病気を持つ人」ではなく、「生活する人」として対象者を捉える看護職としての基本的な能力を養う。さらに、地域包括ケアシステムにおける多機関・多職種連携・協働について柔軟で広い視野を養い、生活者を支えるネットワークの中で地域づくりや健康づくりに貢献できる自己の考えを持つこと』である。(看護学科全体の實習については表1に示す。)

## 2) 實習方法

實習は、医学科の1～3年生、看護学科の1～3年生対象の選択必修科目であり、医学科看護学科合同で実施する。看護学科では3年生で参加した学生のみ単位を認定している。實習は毎年3月に実施している。開催実施年度の10月頃に實習責任者から、各学年へ實習オリエンテーションを行い、興味・関心を持った学生が申し込み履修する。2017年度は30人、2018年度は26人の学生が實習に参加した。

實習初年度である2017年度は、地域医療立て直しのため、県の地域医療再生計画のもと開設された地域サテライトセンターがあり、實習協力の得

られた愛媛県内にある山間へき地のA自治体(以下,A地区)で実施した。2018年度はA地区、B自治体(以下,B地区)の2か所で實習し、A地区では、地域包括支援センター、B地区では地域包括支援センターと保健センターの各々の施設職員である保健師や介護支援専門員が中心となり、教員とともに實習指導の役割を担った。具体的には、各地域の實習担当(指導)者は、対象者への支援の実際について活動を通して学生に説明したり体験させたりした。教員は訪問先等から学生が帰ってきたときに、訪問に同行しどのように感じ、学んだのか等、学生の学びを言語化により確認するという役割を担った。

實習では、医学科1名、看護学科2～3名で2学科を合わせて学生3～4名のグループを編成した。まず、各地区の實習担当(指導)者が、各グループに対して地域で何らかの疾患を有し、支援を受けながら生活する高齢者を複数人選定した。学生は、受け持つ対象者への家庭訪問および外来受診、デイサービス等にも同行し、対象者の暮らしを体験しながら、地域生活への思いを聴きとるという實習を行った。また、地域包括ケアシステムにおける多機関・多職種連携・協働について理解を深めるために、地域連携会議等にも参加できるように實習予定を組み立てた。さらに、實習最終日には、個々の健康課題から地域の生活背景を理解し、「高齢者が住み慣れた地域で生活し続けるために必要な社会資源とその活用」についてグループ

表1 看護学科全体の實習概要

月	4	5～7	8	9	10～12	1	2	3
1年生				基礎看護学實習Ⅰ				在宅生活支援實習(選択)
2年生							基礎看護学實習Ⅱ	在宅生活支援實習(選択)
3年生					老年看護学實習 成人看護学實習(慢性期) 小児看護学實習 精神/母性看護学實習			在宅生活支援實習(選択)
4年生	公衆衛生看護学實習(選択者のみ) 成人看護学實習(急性期) 統合實習Ⅰ 在宅看護論實習 精神/母性看護学實習				統合實習Ⅱ			

ワークを行い、地域へ貢献するための考えを医師、看護師、保健師、訪問看護師、介護支援専門員の関係者の前で報告した。看護学科では、後日実習での学び、グループワークや住民との意見交換からの学びを踏まえ、「高齢者が住み慣れた地域で生活し続けるために必要な社会資源と役割」について学内で報告を行った。

#### 4. データ収集

2018年度の実習に、3年生として参加した学生8名に研究参加への依頼をし、研究への協力の連絡のあった学生6名に対して、研究協力についての説明を行い6名からの同意を得てフォーカス・グループ・ディスカッション（以下、ディスカッション）を実施した。

ディスカッションガイド（以下、ガイド）は、1. ディスカッションについての説明、2. ディスカッションの進め方、3. ディスカッションのテーマ（①現在の学年と卒業後の進路希望先、②在宅生活支援実習の履修に至る経緯（在宅生活支援実習を知ったきっかけ、履修の動機・理由）、③地域医療・地域保健への関心の程度（地域志向性）・関心を持った時期やきっかけ、④在宅生活支援実習での体験、特に印象に残っていること・学び、⑤在宅生活支援実習を履修したことによる認識や学生生活等の変化、⑥今後、在宅生活支援実習に期待すること等を記載した。ディスカッションは、当日ガイドを研究者から研究参加者に渡し、そのガイドの内容に沿ってディスカッションを研究参加者のみで実施してもらい、研究者（在宅生活支援実習の担当教員）は同席しなかった。研究者が同席しなかった理由は、ディスカッションが学生同士で行うことによって、自発的で公平な意見表出を促せるように考慮したためである。また、ディスカッション前に、研究者から学生に対しディスカッションの進め方についてオリエンテーションを行い、学生がガイドに沿ってどのような内容をディスカッションすればよいか確認した上で実施した。ディスカッション内容は、研究参加者全員の同意を得て、研究参加者自身がICレコーダーに録音した。ディスカッション終了後、ディスカッ

ション内容が録音されたICレコーダーを研究参加者から受け取った。

#### 5. 分析方法

ICレコーダーに録音された記録から正確な逐語録を作成した。分析は質的記述的分析を行った。作成した逐語録を繰り返し読み、文章の意味が取れる最小の段落に分け、分析の単位とした。次に「看護学生が在宅生活支援実習を通してどのような学びを得たのか」に焦点を当ててコード化し、コードの共通性を見出す中でカテゴリーを抽出し、抽象度を上げていった。カテゴリーの特徴や命名の検討を重ね、カテゴリーの類似性・相違性を比較しながらカテゴリー間の関係性を探索し分析を進めた。分析については質的研究を行っている研究者からスーパーバイズを受けた。

#### 6. 倫理的配慮

本研究は、愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻研究倫理審査委員会の承認を得た上で実施した（承認番号 看2019-17）。研究協力への意思表示があった学生に対しては、文書及び口頭による十分な説明を行い、研究協力者の自由意思により同意を文書で得た。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 研究協力者の概要

研究参加について承諾が得られた6名の概要を表2に示す。

表2 研究対象者の概要

	在宅生活支援実習 の参加回数	卒業後の進路
A	2	保健師
B	2	看護師
C	2	看護師
D	2	保健師
E	1	保健師
F	2	看護師

## 2. 在宅生活支援実習を履修した看護学生の学び

ディスカッション時間は、約1時間半程度であった。分析の結果、在宅生活支援実習を履修した看護学生の学びは、表3に示す9つのカテゴリ、19のサブカテゴリ、39のコードが抽出された。カテゴリは【 】,サブカテゴリは《 》,コードは〈 〉,発言内容は「 」で示す。

### 1) 【人間の暮らしと人間が生きることの体感と理解】

「私、印象に残っているのが3年生の時に行ったおばあちゃんが95歳なんやけど、階段とか登ってて。95歳ってもう結構、大変というか、自力で生活できるっていうのが想像できなかったんやけど、受け持たせてもらったその方は、急な階段を毎朝毎晩登って。…。」「いろいろな人に世話焼いて『〇〇さん元気やった？って…。』と、学生は、高齢者の地域での実際の生活を体験することで、〈高齢者の実際の生活を見て、人間の可能性の大きさを知る〉〈地域で楽しく生活する高齢者の姿〉〈地域住民のことを気にかける高齢者の姿〉と、高齢者が本来持つ力を発揮し地域住民達との関係性の中で生きる姿を捉えることができていた。また、実習地域の中には平成30年の西日本豪雨で被災した地域も含まれていた。被災地域で継続して実習を履修した学生は「2年連続で同じ人のところに行くことが出来たんやけどその1年の間でも、…地域の人がどんな風にその1年間を過ごしてきたか、どうやって乗り越えてきたかっていう話も聞くことが出来て。」と〈継続して参加することで、被災後の生活を知る〉ことができていた。学生は実際に地域に赴き、地域に住む人々と関わることで【人間の暮らしと人間が生きることの体感と理解】が深まっていた。

### 2) 【地域の特性理解】

学生は実習期間中、地域で生活することで、「実際に自分が住むことで、こういうことが不便やなあっていうことも分かるし、ここがいいなあとかも思うし、人とかもすごく分かる。」「B地区は、愛媛県の中で一番小さい町なんよね…。」と《住

民の視点から理解する地域の特性》を感じ取っていた。

### 3) 【地域で働く保健福祉職と住民との緊密な関係性】

保健師や介護支援専門員に同行し、家庭訪問する中で「地域の人の方から、『今日、〇〇さん(保健師名)来んのかいね。』って…。関わりって大事やし、そうやって呼んでもらえる存在になりたいよね。」と、《地域で働く保健師と住民との実際の関わり》を間近で見て、その関わりから《住民の保健師への信頼》を体感していた。さらに「本当に関わっていないと分からんような難しいところというか…。」と、《対象者と介護支援専門員の関わりから見えてくる支援する上での課題》を感じ、【地域で働く保健福祉職と住民との緊密な関係性】を学ぶことができていた。

### 4) 【理論と実践の融合による大学で学習した知識の深化】

実習で様々なことを経験し、また実習後大学で学ぶ中で「3回生で行った時思わなかった？C先生の授業で見たやつやって!」「なんか、頭に入りやすかったことない?…。」と、《実習内容と授業内容が合致することによる学習の深まり》を実感し【理論と実践の融合による大学で学習した知識の深化】に繋がっていた。

### 5) 【対象者を生活者として捉え尊重し看護することの重要性】

学生は、実際に地域に住む高齢者との関わりを通じ、高齢者の生活を体験することで「その人らしい生活をなるべくするにはどうしたらいいかって考えられるようになったのも、この実習のおかげかなって。」「現状を知ってしまった分、どうにかしてあげたいっていう思いが強くなったよね。」と、〈看護の対象となる人達の生活を知り、何とかしてあげたいという気持ちが強くなる〉〈その人らしい生活を送れるにはどうしたらいいのかを考える〉ように変化していた。また、実習終了後、他領域の実習に行った際には、患者の退院後の生

表3 在宅生活支援実習を履修した看護学生の学び

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
人間の暮らしと人間が生きることの体感と理解	高齢者の地域での暮らしの実際と暮らしに寄せる思いへの理解	高齢者の実際の生活を見て、人間の可能性の大きさを知る
		高齢者のイメージを覆す対象者の生活の様子やADLの高さに驚く
		高齢者が望む生活の意味の思考
		地域で楽しく生活する高齢者の姿
		教えてもらった運動を日課にしている高齢者の姿
		地域住民のことを気にかける高齢者の姿
地域の特性理解	地域で暮らす人々の生活の変化	継続して参加することで、被災後の生活を知る
	住民の視点から理解する地域の特性	実際に住むことで、地域の良いところ、不便なところが分かる 地域の医療機関が十分ではないことを知る
地域で働く保健福祉職と住民との緊密な関係性	地域で働く保健師と住民との実際の関わり	地域包括保健師の業務内容を見ることで、病院から地域に帰るイメージを学ぶ
		実際に一緒に現場に行くことで、高齢者の住む仮設住宅で、保健師が手すりを付ける介入をしている様子を見ることができる
		地域で働く保健師が、住民とドライな関係でなく人として関わっていることを学ぶ
	住民の保健師への信頼	保健師が対象者と実際に関わっている様子から学ぶ
		住民と保健師の関わりから、保健師と住民が繋がっていくことを知る 住民から信頼される保健師の存在
理論と実践の融合による大学で学習した知識の深化	実習内容と授業内容が合致することによる学習の深まり	対象者と介護支援専門員の関わりから見えてくる支援する上での課題
		介護支援専門員と対象者と実際に関わりがないとわからない、支援する上での困難感
		3年生の時の授業で学んだ内容を思い出す 実習後の授業内容が、経験したことと関連付けられ頭に入りやすく理解できる 実習で経験したことと知識がリンクする
対象者を生活者として捉え尊重し看護することの重要性	対象者の持つ力と生活を支える看護	リスク予防重視ではなく、対象者の持っている力や生活を支える看護の姿勢を学ぶ
		その人らしい生活を送れるにはどうしたらいいのかを考える 看護の対象となる人達の生活を知り、何とかしてあげたいという気持ちが強くなる
	病院であっても対象者を地域で生活する人間として捉え尊重する看護	遠いところから入院してきている人がいることを知り、病院でも対象者の生活を支える看護がしたいと考える
		技術を身につけるとかではなく、対象者の今後の生活も考えて、病院での生活を支えたいと思う
		対象者の退院後のことも考えている看護師にアンテナを張る
		患者の個性や意思を汲むことができる看護師を参考にする
	在宅生活支援実習で学んだことで感じる、医療の現状への戸惑い	他領域実習の際、学生の看護計画が、病院の方針に沿わないと指摘され、病院と地域の考え方の違いに衝撃を受ける
		病院から地域へという方針があるのに、何十年も入院しないとけない現状に葛藤する
本来の人間の生活するべき場所は地域	実習に行き、人は地域で生活するのが良いと考える	

地域で働く保健福祉職が地域医療・保健福祉に意欲的に挑戦する姿勢	保健福祉職が感じる地域医療・保健事業への課題	地域のために何かしたいと願うが、人員不足でできないと話す保健師の葛藤を見て、もどかしさを感じる
	地域医療の楽しさ	地域で働く保健師や介護支援専門員の目線を知り、地域医療の難しさを知る
地域一丸となって地域医療・保健福祉に取り組むことの大切さ	地域医療・保健福祉に対する地域住民の理解を得ることの大切さ	地域医療や地域の保健福祉を、地域全体で支えていくには地域住民の理解が大事だと感じる
	地域医療における看護職の役割と地域全体で取り組むことへの課題	地域医療を支えていくための看護職の役割は、対象者に働きかけることだけでなく、地域住民、地域全体に働きかけていくことが大事だが、それはすごく難しいことだと感じる
	地域医療について多職種と意見交換することの大切さ	地域全体で、地域医療に対するモチベーションを保つのは、難しいことだと考える
	医療に携わる者が対象者の帰るところを捉えることの大切さ	地域医療に対する、いろいろな意見を聞き知りたいと思う
医学生と看護学生の視点・意見の相違	医学生と看護学生の視点・意見の相違	医学生と看護学生の視点・意見の相違
地域で働く保健福祉職に対する具体的なイメージの促進	保健師・介護支援専門員の役割の具体的なイメージの促進	地域で働く医療・保健福祉職の活動を体験し、その役割を具体的にイメージする

活を見据え、対話し看護する看護師の姿を見て、「患者さんの個性とか、思っていることをすごい汲んで、テクニシャンとかすごい技術を持っている人だなあって思う。いいなあって参考にしたりとか。」と学生が考える理想の看護モデルとしていた。さらに、「病院やったら当たり前やけど、滑ったらいけない、こけたらいけないから段差無くしてとか、階段なんかもってのほかやから、リスクをのけてみたいなところがあったけど、その方は『こうやって階段を上りよるから今もこうやって元気おれるんよ。』っていつも言っていて、ああそうかあって、自分の家に住みたいっていうのもあるし、全部が全部危ないとかリスクがとかじゃなくて、家に住んで鍛えられとるといって、家に住んでるからこそ保たれとるともあるなあって。」「看護職とかの目線も、今まで病院での実習がベースやけん、リスクは取り払わないといけないとか転倒予防とかって看護計画立てたりとかしよったけど、この実習いくことで、そうじゃ

なくっての目線というか考え方というか、そういうのが得られた感じはする。」と、リスク予防重視ではなく、《対象者の持つ力と生活を支える看護》を学び、【対象者を生活者として捉え尊重し看護することの重要性】を体得することができていた。

#### 6) 【地域で働く保健福祉職が地域医療・保健福祉に意欲的に挑戦する姿勢】

実習では、学生が地域医療、福祉における多職種連携を学ぶ場として、地域連携会議に参加できるよう実習担当（指導）者と相談しスケジュールを組む。学生は地域連携会議に参加し、専門職がディスカッションする様子を見て「地域の人だけじゃなく、働きよる人の目線とかさ、結構知れたし、…。」と、〈地域で働く保健師や介護支援専門員の目線を知り、地域医療の難しさを知る〉のと同時に「『これもやりたいんです！でも人数不足で…』って、なんか熱い思いの葛藤をすごく聞いて

てさ、もどかしく感じた。」と、《保健福祉職が感じる地域医療・保健事業への課題》に対し、住民と共に地域医療・保健福祉向上に向けて【地域で働く保健福祉職が地域医療・保健福祉に意欲的に挑戦する姿勢】を感じ取っていた。

#### 7) 【地域一丸となって地域医療・保健福祉に取り組むことの大切さ】

学生は、実習で高齢者や地域住民と関わりながら働く専門職の姿を見て、「やっぱり、その人助けるのってそこに住んだら住民の理解っていうのかなあ。それがすごい大事なあって思ってしまった。」「私ら専門職の役割って、対象者に働きかけることも大事やけど、対象者の周りにおける住民とかにも気を配れないと、その人を支えていくモチベーションを町全体というか、地域全体で作るのってすごい難しいかなあと思った。」と、地域医療・保健福祉を向上させていくには、専門職だけではなく、地域住民と地域の課題を共有した上で地域住民と共に取り組んでいくことの大切さを肌で感じ取っていた。

#### 8) 【医学生と看護学生の視点・意見の相違】

看護学生は、医学科生とグループワークを行い意見交換する中で、「視点が違うからぶつかることもあるなあって。」と【医学生と看護学生の視点・意見の相違】を感じていた。

#### 9) 【地域で働く保健福祉職に対する具体的なイメージの促進】

実習では、保健師や介護支援専門員と一緒に対象者の自宅を訪問し、専門職の実際の関りを見て学ぶ。また、対象者宅へ向かう道中では、専門職の車に同乗し、対象者とのこれまでの関りや支援課題を聞く機会を得ることができた。学生は、これまでの実習では実際に出会うことが出来なかった、地域で働く保健福祉職と実際に関わることで【地域で働く保健福祉職に対する具体的なイメージの促進】がされていた。

## IV. 考 察

分析から明らかになった、「看護学生が在宅生活支援実習を履修して得た学び」について、本実習の目的を踏まえて考察する。

### ①対象者の価値観やニーズの理解、「生活する人」として対象者を捉える

学生は、在宅生活支援実習を履修することで、これまでのベッドサイドナーシングでは体験できなかった高齢者の実際の暮らしに密着し、高齢者自ら自分の持つ力を維持しようと努力していることや持つ力を活かして日々の生活を工夫し暮らしていること、地域住民との関係性の中で、高齢者自身もその中の一人として共に支えあって生活する様子を体感することができた。また、そのことによって学生が抱く高齢者観に変容が起きたと考える。

看護基礎教育検討会報告書では、現代の看護学生は、生活スタイルの変化による人間関係の希薄化、生活経験の乏しさから、対象を理解する能力やコミュニケーション能力が不十分であり、これからの看護教育では、これらの能力を強化することを求めている（厚生労働省看護基礎教育検討会、2019）。さらに後藤ら（2019）は、医療従事者の高齢者観において、肯定的なイメージを持っている場合はサービスの質の向上になり、否定的なイメージの場合はサービスの質の低下を招くことから、学生が高齢者に対してどのようなイメージを持つかは、看護に影響を与えられ、学生の高齢者観を育むための学習過程は重要であると述べている（後藤、村山、内野、小澤、2019）。本研究においても「95歳って結構、もう大変というか、自力で生活できるっていうのが想像できなかったけど…」という学生の発言から、学生が抱く高齢者像には、ネガティブなイメージがあったことが推察できる。看護職者として、医学モデルで高齢者の加齢による身体的、精神的、社会的変化を学び理解することはもちろん必須ではあるが、その視点に囚われてしまっただけでは対象者への理解が十分ではなく、対象に応じた看護の展開は難しい。看護



の対象となる高齢者とその暮らしに密着することで、高齢者が住み慣れた地域生活に寄せる思いや、生活を維持するために日々の生活の中で工夫や努力を実施・継続していることを知ることができた。そのことにより、対象者の地域での暮らしや健康に対する価値観やニーズを捉えることができ、さらに高齢者を年齢のみに囚われず、その人自身を身体面、精神面、社会面から多面的に捉え、対象を理解する能力が育まれたと考える。

また、本実習では、対象者宅への訪問等、現場での実習指導は保健師や介護支援専門員が中心となり行い、教員は実習後に、学生の学びを言語化により確認する役割を担った。このような実習指導体制を取ることで、学生は、地域で働く保健福祉職が対象者の生活に寄り添い、その生活を支える役割を担っていることを体感することができた。また、グループメンバーや教員との振り返りを通して、支援の対象となる者は地域でそれぞれの生活を営む者であり、看護職としても対象者の生活を支える視点を持ち、対象者の生活を捉え看護することの重要性を改めて認識することができたと考える。

学生の語りにより抽出された学びから、高齢者をはじめとする地域に住む人々の暮らしを体験し、見聞きすることは生活経験の未熟な現代の看護学生が幅広い視野を持ち看護の対象となる人間を理解するために効果的であったと考える。さらに、高齢者の実際の暮らしを聴きとり、さらにその人達の生活を支える地域で働く保健福祉職の実際の関わりを見学することによって、看護職として対象者の生活を捉えることの重要性を学ぶことに繋がったと考える。

## ②多機関・多職種連携・協働について広い視野をもつ

学生は、地域で働く保健福祉専門職とともに実習を行った。さらに地域連携会議にも参加し、専門職が地域の医療や保健福祉向上に向け、意欲的に挑戦する姿勢を学ぶことができた。このように地域で働く保健福祉職とコミュニケーションをとり、保健福祉職の活動の実際を見学することによ

り、地域で働く保健福祉職の役割について具体的なイメージが促進されたと考える。一方で、「(医学科生とは)考え方が違うと思った。」との発言が得られている。吾妻らの研究では、チーム医療を実践している看護師が感じる連携・協働の困難として「医師と連携・協働する」ことを挙げており、他の医療スタッフよりも医師との関係性において困難を感じていることが示されている(吾妻, 神谷, 岡崎, 遠藤, 2014)。厚生労働省は、「地域包括ケアシステム構築に向けた制度及びサービスの在り方に関する研究事業報告書」の中で、2040年に向けて、医療と介護をより「統合された状態」として「多職種連携によるチームケア」が当たり前の状態を目指すことを求めている(厚生労働省, 2016)。本実習においても、地域包括ケアシステム推進に向け、学生が多職種連携についての思考を深めることができるよう、医学生を含めたグループ編成で実習を行い、最終日にはグループワークを行うように実習内容を構成している。本研究では、医学生との考え方の違いの詳細について明らかにできていないが、実習のグループワークでは、話し合いの過程で医学生と看護学生間の視点や事象の捉え方の違いによる葛藤があったと推察される。チーム医療の推進に関する報告書では、看護職を「チーム医療のキーパーソン」と示している(厚生労働省, 2010)。看護職は医療の知識も持っており、地域包括ケアシステムにおいて医療と生活を繋ぐことができる重要な役割を担っていることから、医師ともコミュニケーションを取り、連携・協働できる能力を高めていく必要がある。箱崎らは、各職種には異なる役割だけでなく、異なる価値観があるため、職種間の対立が起こることがある。そのため多職種連携教育においては、他職種の役割に関する知識だけでなく、価値観についても教授する必要があると述べている(箱崎, 久保, 神田, 2017)。これらのことから、実習では、グループワーク時に、意見の相違があったとしても、その意見を否定的に捉えるのではなく、なぜ医師、あるいは他の職種がそのように考えるのかりフレクションする機会を設け、それぞれの職種の役割を認識し、その上で看護職としての役

割が思考できるような実習指導方法を検討していく必要があると考える。そうすることで、より有機的な多職種連携に繋がっていくと考える。

### ③生活者のネットワークの中で地域づくりや健康づくりに貢献できる自己の考えを持つ

学生は「私ら専門職の役割って対象者に働きかけることも大事やけど、対象者の周りにおける住民の人とかにも気を配れんと、その人を支えていくモチベーションを町全体というか、地域全体で作るのってすごい難しかなあって思った。」と述べていた。このことから、学生は地域づくりや健康づくりは専門職が主導で行うものではなく、対象者や住民に働きかけ、理解を得ながら支援していくことの重要性を学んだと推察された。学生が生活者のネットワークの中で地域づくりや健康づくりに貢献できる自己の考えを持つという目的が達成できたかどうかについては、ディスカッションでは明らかにすることはできなかった。そのため、今後、本項目の達成度を評価するためには実際に学生に本項目について語ってもらう、レポートを課す等、具体的な評価方法の検討が必要である。

### ④地域包括ケアシステムにおける看護職の役割の認識

先行研究では、地域包括ケアシステムにおいて看護師に求められる能力として「生活者として捉える」「対象と家族の思いに寄り添う」「対象を尊重した意思決定を支える」「対象の生活の場で必要な看護をする」「多職種と協働する」「地域を看護職として包括的に捉える」が挙げられている(海野,田村,村井,2020)。本研究で得られた内容と海野らが明らかにした能力を照らし合わせると、海野らが示した能力のうち、「生活者として捉える」「対象の生活の場で必要な看護をする」は育成することができたと考える。一方、「対象と家族の思いに寄り添う」「対象を尊重した意思決定を支える」については、家族支援、意思決定を支えるといった内容までは学生の学びからは抽出できなかった。また、海野らは「多職種と協働する」は、

多職種間の専門性を理解し協働すること、「[地域を看護職として包括的に捉える]」は、地域におけるシステム構築に尽力することと示しているが、本研究では【地域で働く保健福祉職に対する具体的なイメージの促進】として、地域医療を支えていくためには対象者だけでなく地域住民にも働きかけていくことが重要であるという学びは抽出できたが多職種協働、システム構築については抽出されなかった。これに関しては、本実習が地域高齢者の暮らしを体験しながら、これまでの生活やこれからの生活に関する希望、現在の生活に関する思いを聴きとる実習が中心であること、さらに5日間という短期間の実習であることから、本実習のみで海野ら(2020)が示す能力を獲得することは若干困難なのではないかとも考えられた。そのため学生が、本実習を通し、地域包括ケアシステムにおける看護職の役割を認識し、システム構築に尽力する能力を獲得するためには、高齢者が住み慣れた地域で生活し続けるための社会資源・社会システムを看護職としてどのように支えていくことができるのか、学生の学びをさらに一歩踏み込んでシステム・制度的な側面からの学びとなる意味付けを目的とした教員からの説明や関わりが重要になるだろう。

## V. 本研究の課題

本研究にはいくつか限界が挙げられる。1点目は、ディスカッションに研究者が同席しなかったため、研究協力者の語りの内容の詳細が不明な部分があったことである。2点目は、本実習は選択制の科目であり、参加した学生は、実習開始以前から地域における看護、地域医療について興味・関心があったことが予想される。また本研究の対象者は、3年生の時に実習を履修した看護学科4年生であり、実習履修時からディスカッションまでに約10ヶ月経過しており、思い出しバイアスがあることが考えられる。今後は、ディスカッション時に大学院生といった学生の語りに影響を与えないであろうインタビュアーを設定し、学生の学びが詳細に語られるような方法を取ること、さら

に調査協力者は1～3年生から募り、学年や実習参加回数等で語る内容に変化はあるのか等分析していく必要があるであろう。

## VI. 結 論

本研究では、在宅生活支援実習を通して【人間の暮らしと人間が生きることの体感と理解】【地域の特性理解】【地域で働く保健福祉職と住民との緊密な関係性】【理論と実践の融合による大学で学習した知識の深化】【対象者を生活者として捉え看護することの重要性】【地域で働く保健福祉職が地域医療・保健福祉に意欲的に挑戦する姿勢】【地域一丸となって地域医療・保健福祉に取り組むことの大切さ】【医学生と看護学生の視点・意見の相違】【地域で働く保健福祉職に対する具体的イメージの促進】を学修していることが明らかとなった。

### 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

## 文 献

- 吾妻知美,神谷美紀子,岡崎美晴,遠藤圭子.(2013).チーム医療を実践している看護師が感じる連携・協働の困難.甲南女子大学紀要 看護学・リハビリテーション学編,7,23-33.
- 後藤雪絵,村山由子,内野聖子,小澤美和.(2019).地域在住高齢者の理解に向けた老年看護学実習の学び.岐阜医療科学大学紀要,13,7-15.
- 箱崎友美,久保仁美,神田清子.(2017).地域包括ケア時代の保健・医療・福祉を担う人材に対する教育内容の分析-地域志向型の看護基礎教育内容の検討-.群馬保健学研究,38,23-33.
- 柏木聖代,川村佐和子,原口道子.(2015).看護基礎教育における在宅看護学実習の現状と課題.訪問看護ステーションへのインタビュー調査から.日本在宅看護学会誌,3(2),44-54.
- 厚生労働省 看護基礎教育検討会報告書(令和元年10月15日).<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>(最終アクセス2020年10月2日)

- 厚生労働省 地域包括ケアシステム構築に向けた制度及びサービスのあり方に関する研究事業報告書(平成28年3月).[https://www.murc.jp/uploads/2016/05/koukai\\_160518\\_c1.pdf](https://www.murc.jp/uploads/2016/05/koukai_160518_c1.pdf)(最終アクセス2020年12月15日)
- 厚生労働省 チーム医療の推進について(チーム医療の推進に関する検討会 報告書)(平成22年3月19日).<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0319-9a.pdf>(最終アクセス2021年1月7日)
- 日本看護協会2025年に向けた看護の挑戦 看護の将来ビジョン(2015年6月).<https://www.nurse.or.jp/home/about/vision/index.html>(最終アクセス2020年10月2日)
- 表志津子.(2017).地域を知るための看護師教育.看護展望,7,27-30.
- 海野潔美,田村麻里子,村井文江.(2020).地域包括ケアシステムにおいて看護師に求められる能力に関する文献検討.常磐看護学研究雑誌,2,63-73.